

目的 江戸時代中、後期の家相文献から住まいのあり方を探る研究の一環として、本報告では、家相判断の際の磁針の置き場所、即ち中心の求め方について書いた部分进行分析する。家相判断では、中心の設定如何で結果が異なるためこれを重要視している場合が多い。それ故に、ここから家相判断で重用視するものが明らかになると考える。

方法 比較検討に用いる家相文献は、寛政10年刊松浦東鷄著「家相図解」、享和元年刊松浦東鷄著「家相図説大全」、享和元年序文苗村三岐著「相宅小鑑」、享和3年長田薫雀著「家相図解全書」、天保11年松浦琴鶴著「家相秘伝集」の5冊である。それぞれから中心の取り方の記述を拾い、分析、考察する。

結論 松浦東鷄・琴鶴の文献では、中心の取り方を詳細に扱っているが、他の2文献では「居間を主として間取りの通路を定め…」の他、図に二三現れる程度である。東鷄派の3文献では、磁針の据え場所を主人の居間（或いは寝所）としているが、重要な部屋であるため、敷地及び家宅の中央に配置すべきだという観点に立っている。家宅の中央は、家相判断上重要な「坤良中、井竈厠」の「三所三備」の一つでもあり、「中」は主に住まいの湿気対策の項目で語られている。更に「家相秘伝集」では、中心の定め方を敷地、家屋の形状別に多数図示し、中心を二カ所とる場合や、村や町の風水判断時の中心などにも言及している。判断の理由づけには陰陽五行説の相生相剋理論を演繹し、主の寝所の畳数を決定している。流派による中心の扱いの違い、東鷄派の中心決定の詳細、湿気対策や住まいの中央を居間にするなどの経験則の理論付けに家相を用いる状況が明らかになった。